

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 井上 史雄



概要

山下暁美氏の博士学位請求論文、「海外の日本語の新しい言語秩序」は、ブラジル日系人の敬語を中心にすえて、海外の日本語における新しい言語体系の成立を探ったものである。実証的データを元に、ブラジル日系人の敬語が独自の体系性を持っていることを指摘した。これにより、他地域での敬語と比較するための基準点が定められたことになる。

ブラジル日系人についての得がたい大量調査データをコンピュータで処理し、多変量解析法の一つ「林の数量化第3類」を適用して、日系人の敬語使用がコロニア型と都市型の二つに判別されることを指摘した。またアメリカ日系人と西日本方言の話し手についても同様の大量調査データを入手し、コンピュータで処理して結果を対比し、ブラジル日系人の敬語の特色を浮き彫りにした。

ブラジル移民の言語環境に関しては、日系人の日本語教育やドイツ系移民の研究などの関連テーマについて、氏はすでに他の多くの学术论文で公にしている。本論文はそれらの基礎の上に一層高度な学問的貢献をなすものであり、博士の学位にふさわしいものと認められた。

位置づけ

海外の日本語の敬語というテーマは、新天地における新方言 **new dialect** の発生という社会言語学の最新の関心に合致した新鮮な着眼点である。

海外の日本語で敬語が貧弱または未発達であることは、(北海道方言、台湾・朝鮮半島・旧満州やハワイ・アメリカ西海岸の移民の言語を含めて)、以前から気づかれていた。しかし奇妙なことに海外の日本語の敬語体系について、本格的に扱った研究は、ほとんど存在しなかった。そもそも移民の言語体系の記述も、ハワイやアメリカ西海岸の日本語を除き、不完全だった。体系として確立し、次世代に継承されるだけの活力をもった方言は日本国内にしか存在しないという思いこみが、この背景にある。

移民の敬語未発達の理由についても、移民の出身県の方言の影響、移民の出身社会階層の影響、新天地での開拓民としての平等な人間関係、新天地での接触言語（英語・ポルト

ガル語など)の言語干渉等々、様々な説明がアドホックに行われていた。

最近の社会言語学的関心の高まりに従って、二言語の使い分けについての研究が盛んになったが、そこでも敬語については付随的に扱われるに過ぎなかった。文法的な敬語は日本語・朝鮮語などの限られた言語(膠着語)に際だった発達を見せる。一方ポルトガル語では二人称代名詞の敬語的使い分けを保っている。ブラジル日系人の敬語に焦点を絞ったのは、言語・方言・敬語などの言語変種の普遍的使い分け原理を追求する社会言語学の最近の傾向に合致する、すぐれた着眼である。

データ

ブラジル日系人についてのデータは、実は入手が困難である。ブラジル国民としての意識醸成に熱心なあまり「日系人」とか「ドイツ系」「イタリア系」のような分類に基づく調査をブラジル政府が喜ばない傾向があり、また日本と違って住民票や最新の選挙人名簿が整っているわけでもないので、日系人だけを調査するのは困難である。本調査では、山下氏がかつてブラジルに滞在して日本語教育の革新に貢献したときの人脈を使って、日系人のアンケートを効率的に実施できた。

この得がたいデータを中心に、大量調査データをコンピュータで処理し、クロス集計を重ねて、グラフ化して個々の現象を解釈するとともに、多変量解析法の一つ「林の数量化第3類」にかけて、データ全体の大きな傾向を把握しようとしてつとめた。

調査事項は、言語項目と非言語項目に分かれる。言語項目の中心を、この論文では「敬意表現」と呼ぶ。「待遇表現」はマイナス方向の卑罵表現も含むが、この論文ではプラス方向の表現のみを扱うからである。なおこの用語は外国語学の世界から広がり、最近では国語審議会の報告などでも使われている。「敬意表現」に含めたのは4現象、すなわち、敬語形式、「オ～」「ゴ～」、呼称、方言である。

結果

データ全体に多変量解析法を適用した結果、ブラジル日系人の敬語使用状況が、大きく2分されることが見いだされた。その使用者の非言語的背景と照らし合わせて、「コロニア(入植地)型」と「都市型」の敬語使用と名付けた。これまでの社会言語学的調査研究では、言語使用を世代や年齢・性別などの言語外的な基準によってクロス集計して説明することが多く、移民の言語では「1世」「2世」「3世」などの外的条件と結びつけて、

3 典型に分けることが多かった。本研究で純粋に言語的な基準によって二つの典型を取り出したのは、新たな貢献といえる。

入植した当時の共通語はコロニア型で、中間的な言語体系を持つ日本語として位置付けられた。さらに、コロニア型が変化し、ブラジル社会に適応した新体系は都市型と名付けられた。敬語形式の使い分けや、敬語に関する意識に二重構造が見られることから明らかになった。コロニア型は農業基盤であり、都市型は商業を基盤としている。日系ブラジル人社会で、農業基盤から商業基盤への移動が起こったことに対応する。新体系の都市型の特徴は、大きく3つ挙げられる。

まず、方言の使用率と、敬語形式の「～レル・ラレル」の使用率から、西日本基盤の体系であることがわかった。次に「オ～」「ゴ～」の使用率、及び、敬語形式と性別とのクロス結果により、性差のない新体系であることが明らかになった。第3に敬語形式の使用について、ブラジル・ポルトガル語の干渉から、目上より年輩に丁寧な体系という特徴があることがわかった。敬語使用の変化原因を、原住地の言語体系、移住地での人間関係と、ポルトガル語の言語干渉に、求めたことになる。得られたデータの細部にわたる検討と、ブラジル移民社会についての先行研究の結果からみても、説得力のある成果である。

またブラジル日系人と同一の調査をアメリカ日系人と西日本方言の話し手についても行って、調査結果を対比した。そのグラフでも、ブラジル日系人の特色が浮き彫りにされた。

ブラジル日系人において、敬語が単純化し、使用の男女差が失われ、目上目下の関係よりも使用者自身の意識的使い分けに向かうなどの傾向が得られたが、これらは日本国内の若い世代の敬語使用の傾向としても出ており、海外で同じ傾向が見られたのは、興味深い。日本語自体が示す変化傾向かも知れないが、またポライトネスに関わる言語普遍的な法則的方向性の可能性もある。

角筭采尺

ブラジル日系人の言語に関する従来の研究では、本土の日本語とくらべて崩れた、劣ったものとするような態度の記述が多かった。ことに敬語に関しては、敬語を知らないとか、人を敬う心が育っていないとか、女らしいたしなみがないなどと酷評されることもあった。しかし、この論文では、海外の日本語について、それなりの新しい体系が成立しているという、積極的評価の立場をとっている。構造言語学の体系記述の立場からいえば、当然で、理論的には納得できる研究姿勢である。しかし、海外の日本語に実際に適用した研究は、

ほとんどなく、ハワイ日系人の日本語に関する研究が唯一の例外だった。本研究によって、新しい視点での日本語研究が育つことが期待される。

以上の考察によって得られた全体像を、ピラミッド型のモデルとして鮮明な形で提示したことも、高く評価される。非言語項目をピラミッドの土台に置いて、言語項目を支える条件とした。言語項目は、文法的現象の敬語形式、語彙的現象の丁寧語の「オ～」「ゴ～」、敬称を含む呼称であり、これにより敬意表現の全体像を考察した。

審査

本論文の審査にあたったのは、以下の5人である（五〇音順）。井上史雄（主査、外国語学部教授・社会言語学・方言学）、宇佐美まゆみ（外国語学部助教授・言語社会心理学）、宗宮喜代子（外国語学部教授・英語学・意味論）、高垣敏博（外国語学部教授・スペイン語学）、田島信元（外国語学部教授・発達心理学・認知心理学）。

評価

本論文は博士号にふさわしいすぐれた業績と判断された。さらに将来も研究を続ける価値があると推奨され、将来の研究の発展のために、次のような様々な指摘がなされた。

図表の提示の仕方と説明の文体が、心理学などの学術論文の記述スタイルに合致しないとの指摘があったが、日本語学をはじめとする人文科学では違和感がないと、弁護された。

また、結果の提示に際して、まず多変量解析法の適用結果によって言語項目の全体像を示し、そのあと個々の項目や話者の社会的背景の記述に移った点について、著者の論理の押し付けという印象もあった。しかし個々の細かいデータを先に見て最後に結論が提示されるという従来型の論述に比べて、結論を先取りして記述したおかげで、論理の全体像が分かりやすいというプラス評価も得られた。

さらに、すでに入手済みのインタビューによる自然談話のデータを、もっと生かすべきだとの提案があった。現在関心が集まっているポライトネス理論を踏まえながら、日系人の敬語という新しい観点から研究を発展させていくことは興味深く、結果が期待される。

以上のような論文の論述手法についての印象の差異はあったが、本論文の全体的貢献については、審査委員全員から積極的な高い評価が得られ、博士号にふさわしい業績と判断された。